伝統の創造こそが日本文化の本来の姿だ

神田明神権禰宜　岸川雅範（きしかわ まさのり）

Essay　時の調べ

２０１９（令和元）年５月、日本三大祭りの１つといわれる神田祭がにぎにぎしく行われた。多くの神輿（みこし）が、にぎやかな氏子たちの「わっしょい」「セイヤ」の掛け声とともに町中で担がれた。

この神輿担ぎこそ、江戸の昔より連綿と変わらず続けられてきた「江戸の華」神田祭の姿であると、今日思っている人が多い。

しかし実は違う。

江戸時代の神田祭では、氏子の人々は最大８ｍの山車や附祭（つけまつり）を多く出し、神輿は神社管理の宮神輿２基のみ、雇われた人足によりもむこともなく粛々と担がれていた。それが江戸の華・神田祭の姿であった。

今日のように氏子により多くの神輿がつくられるようになるのは、大正時代からであった。山車は、町の改組、電線架線、不景気などの要因から明治40年代には出されなくなった。江戸時代の神田祭の姿は、このころには断絶していたのである。

明治末から大正時代に、近代的な町内会が組織され、町管理の町神輿がつくられ町内の人々で担がれるようになり、今日のような多くの神輿が担がれる神田祭の形へと変容していった。

各時代にその姿が変容し、それが幾度も繰り返されていくことで、神田祭は継承され今に至っているのである。

東京では最近外国人観光客が増加し、それに伴い日本人が外国人に日本の伝統文化を紹介しようとする動きが盛んのようだ。

日本の伝統文化というと、神社仏閣や茶室、茶道や歌舞伎などがイメージされるだろう。こうした伝統に対して、多くの人たちが、古くからその形を変えずに伝えられてきたものと信じている。

果たしてそうなのか。

現在使われる不変の継承を意味する「伝統」は、実は明治時代に日本が文

令和元年５月に行われた神田祭

明開化を目指して西洋化が進むなかで「tradition」の翻訳としてつくられた言葉であった。

伝統という言葉こそ、明治時代に創造された新たな「伝統」であった。

僕は普段白衣袴の姿で、「伝統」的ともいわれる神殿で神事の奉仕をしている。がしかし、実際に神田明神へ参拝する人々は現代人であり、神社は現代にある文化でもあるのだ。

「神田明神ではパソコンのお守りを授与しています」というと大抵の人は笑う。きっと伝統文化に現代文化が合わさるとき、何か違和感を感じるからだろう。IT情報安全守護というパソコンのお守りは、2002(平成14)年から授与が始まり、フリーズやコンピューターウイルス除け、個人情報保護、サイバーテロ防護などの願いが込められた。神社が現代人の願いを受け入れる場であるならば、パソコンのお守りがあって当たり前のこと。

境内で行われた神田プロレスによる奉納プロレス

アニメ『シュタインズ・ゲート・ゼロ』とコラボした際のポスター

『ラブライブ!』などのアニメとのコラボでも神田明神は話題になることが多いが、他にも読売ジャイアンツとのコラボ試合の開催、境内での奉納プロレス、フジテレビ月9ドラマ『ロングバケーション』第1話のロケ地、さらに小説やドラマで有名な『銭形平次』の記念碑が境内に建てられたりもしている。さまざまな現代文化を受け入れるのが神田明神で、アニメとのコラボはその1つにすぎない。

1987(昭和62)年に大ヒットした俵万智の短歌集『サラダ記念日』は新しい現代短歌の先駆けといわれたが、それに対して伝統的ではないと批判したのは、伝統の「外」にいる保守的そして権威主義的な批評家や啓蒙主義者たちであった。一方、伝統の「内」にいる歌壇の短歌人たちは、短歌の世界のバラエティーを広げるとして認め、若い人たちが短歌に関心を持ってくれればいい、と前向きな態度であったという。

短歌人や神職など伝統の「内」にいる人々は、日々常に伝統が変容していくことを意識し、さらに時代にあわせて伝統を創造していく役割をも担っていることを理解している。

本来、伝統は各時代に創造され続けることで、さらに新たな伝統が生まれていく、その歴史の繰り返しなのである。

略歴

1974(昭和49)年、東京生まれ。國學院大学大学院文学研究科神道学専攻博士課程後期修了。博士(神道学)。2004(平成16)年、神田神社に奉職し広報、資料館を主に担当。編著書に『江戸天下祭の研究――近世近代における神田祭の持続と変容』(岩田書院)、『新版 神社のおしえ』(小学館)など。